

NHK

6月16日(木)
夜8時~8時45分

にいがた8

TVで見よう
大風合戦

NST

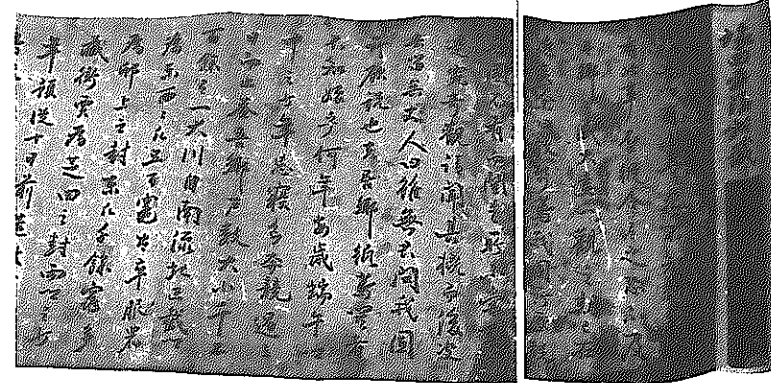
6月11日(土)
午後5時~5時30分
舞い上がれ
白根の大風

大風一口メモ

- 大きさ 縦7メートル 横5メートル(24畳大)
使用される和紙は 324枚
- 重さ 50キログラム
- はなお わら縄製30メートル 42本
- 風網 直径2.5センチ 長さ130メートル 重さ40キログラム 日本麻製で名人が100日あまりかけて作りあげる
- 枚数 合戦期間中に作られる大風は200枚 ほか5畳大の巻風が1,200枚、子ども風合戦では100枚が作られる
- 史上最長の合戦 昭和7年6月12日、鯛町組対上組(現在の謙信組)の合戦は、4時間にも及ぶ史上最長の合戦となった。宵闇が迫る午後7時になってもなお、風網は切れず、両軍力尽きて、ついに初の引き分けを記録した
- 世界一の大風 昭和55年3月30日、縦19メートル、横14メートルの世界最大の大風を製作、飛揚に成功 '81ギネスブックに記録された

本市の観光の大きな柱となっている大風合戦も、今に残されている史料からその横顔を追ってみると、その時代の世相や政治を反映し、いろいろな横顔を持っていることに気がつきます。川面に映る大風の勇姿に、いにしえ人へと思いをほせるのもまた一つの楽しみでは。

(史料提供は教育委員会社会教育課市史編さん係)



◀弘化4年(1847)。
「白根紙鷲合戦見聞記」
(桜町・塚田佳弘氏所蔵)



▲明治末ごろの風合戦風景

大風合戦

白根紙鷲



▲明治三十六年六月七日
新潟新聞

大風合戦歴史散歩

元祿時代は 風揚げブーム

風の歴史は古く、中国の文献によれば二〇〇年以上昔にさかのぼることができ、我が国で風揚げが一般大衆に普及したのは元祿時代(一六八八年~一七〇三年)になってからといわれます。当時は庶民の娯楽として、年間を通じて多くの風が揚げられたようです。庶民の文化が華ひらいた元祿という時代に思いをはせると、川べりのどかに風揚げを楽しむ風情がしのべれます。

庶民の娯楽として、自然発生的に全国に広まった風揚げが、どのようにして「合戦」として白根に定着したのかは、多くの言い伝えや資料に残されているところです。

文献にはつきりと大風合戦の記述が現れるのは、弘化四年(一八四七年)の「白根紙鷲合

活気に満ちる 明治時代

明治に入り、商業、経済が発達してくると、大風合戦もそれまでの庶民の娯楽的なものから、スポンサーがついた大がかりなものへと変わります。

当時の白根は、白根紋りに代表される染め物の一大産地で、明治四十年ごろには三千軒近くの染物屋が軒を並べていたそうです。



▲レルヒ中佐から贈られた優勝旗(上)
下は東京白根会から贈られたもの

「各組の青年たちが競って風を揚げ、商家のだんな衆が後押しをする」そんな当時の雰囲気を感じる写真が、右上の合戦風景です。そのころの青年たちにとって、大風合戦と盆踊りは、この上ない楽しみであったようです。

活気に満ちた明治の時代に、特筆すべき出来事がありました。スキーを伝えたことで名高いオーストリアのレルヒ中佐の来訪です。白根の大風合戦に感動したレルヒ中佐は大風合戦のために優勝旗を寄贈します。当時は日露戦争の勝利に、国じゅうが沸き返っていた時代でもありました。

そのころ白根町のほか、茨曾根村や根岸村でも大風合戦が行われたという記録が見られます。また、庄瀬でも行われたという説があります。それらが自然消滅的に姿を消したのは、地理的な条件のほか、電車の開通によるところが大きいと思われます。

ドイツの優勝旗が 語る昭和初期

昭和に入り、太平洋戦争に突入すると、大風合戦にも戦争色が現れてきます。昭和十六年六月、ドイツのオットー大使からハーケンクロイツをデザインした優勝旗が贈られました。その時の贈呈の言葉には、大風合戦を「雄大にして勇壯」とたたえ、日独同盟国の相互扶助と親善がうたわれています。しかし戦局の悪化とともに大風合戦は中断、五年ぶりに復活したのは昭和二十三年になってからのことでした。

* * *